

2000年・中国女文字報告

遠藤 織枝・孫 琦

3月に、共同研究者である劉穎、黄雪貞が現地江永県に行き、何艶新の文字資料を完成するための、何艶新に対する聞き取り調査と、女文字で書かれた歌のメロディー・リズムを知るための録音採取を行なった。

何艶新は、99年4月、遠藤らが現地を訪ねたときは、97年以降の、日本訪問や夫との死別、息子の進学など、生活上のさまざまなできごとを女文字で書いてくれた。しかし、今回劉らが訪ねた際は、生活に追われて、まったく時間的・精神的な余裕がなくて、前年以来何も書いていないという。以前に書いた文字の音韻や用法を尋ねても「忘れた」とか「そんな字は知らない」などと言う。

現地では、陽喚宜が91歳の高齢で、あまり書けなくなっているし、98年以来書きはじめた何静華の文字は、本からの学習によるもので、文字数は多いが、従来の女性たちの使用法や書き方を自己流に改変されてしまっているものが多い。

したがって、94年以来取り戻してきた何艶新の文字はいちばん伝統に忠実なもので、貴重なものと言える。その文字が、生活上の理由で再び失われようとしているのは、いかにも残念なことである。

現地政府がこの文字を現地の貴重な文化財として重要視し、何が文字を書き続けられるだけの保護と援助の施策を早急にとってくれるよう望むや切である。

歌については、今までも女文字作品を歌ってもらったり、文字は知らないが歌だけは歌える人に民歌や抗日歌などを歌ってもらって録音してきた。女文字自身がこれら古くから伝わる歌や、女性たちが別れるのを互いに悲しむ思いを表現した歌を記録するために生まれたと考えられるので、文字と歌とは密接な関係がある。

今回は何艶新の歌のことばとメロディーやリズムとの関係を知るために、何が97年に書いた自伝書の一部を改めて歌ってもらった。同じ歌を古くからの歌をたくさん知っている何静華にも歌ってもらって比較した。音楽的な面からの研究はほとんどなされていないが、女文字が歌のことばを表記するものである以上、歌の側面を無視するわけにはいかない。

今年3月、『人民日報』海外版に、中国の女文字研究の第1人者である趙麗明の「女書の最も古い資料—太平天国女書銅貨」という文章が載った(2000.3.2、コピーで一部示す)。南京の古銭収集家が集めた古銭の中に女文字が書かれているのが1枚みつかったという。

2000年3月2日 星期四 第7版

人民日報(海外版)



女書銅幣正反面

女書最早資料——太平天国女書銅幣

趙麗明

女書是流傳于湖南農家婦女的專用表音文字。目前已瀕臨消亡。迄今最早的史志資料出自《湖南各县调查笔记》(1931)上的记载。1995年9月18日《扬子晚报》刊登了民间收藏家冯京三的一篇文章

《太平天国女书文字钱》。这一实证将女书盛行时期的可靠下限。由清末民初向前推进了近百年,即19世纪前叶。

我前不久专赴南京,拜访了太平天国女书铜币持有者冯京三先生。据冯京三讲,这枚铜币是他1993年在南京朝天宫古玩市场的地摊上收集到的。

我研究女书已有十多年了,当迫不及待地见到铜币时,熟悉的字体在我眼前一亮,不禁惊喜地叹道:是女书!真的是女书!惊喜之后,马上想到的是一连串的问题:为什么湖南崇山峻岭的女书竟然出现在远隔千山万水的都城南京?为什么普通农妇使用的妇女文字出现在应该使用国家法定文字的货币上?

“天”,因清“姓为天”(郭和华)及洪秀全小名“天贵”,而以天(休、野)代之。

女书是怎样与太平天国发生联系的呢?原来太平军曾经过女书流传地区,并在当地扩军二万人。粤湘交界处的江华(今为瑶族自治县)、永明(今江永)、道州(今道县),正是女书盛行的中心地带,当地有洪秀全的传说,有太平军的墓葬群,女书中也有《太平军走永明》等作品。懂女书者很可能就在这次扩军中加入太平军。

太平天国1853年建都南京(今南京)后,仍实行“男行女行”分营制度,每军设女军帅,其他还有女总管、女指挥、女将军等。内官在天王宫及各王府内执役,最高为女丞相,其他还有女承宣、女童诏等,代静庵等。后来又设“女爵”,与男子的大爵世爵平行。1855年3月,太平天国在天京废除隔离男女制度,准许夫妻团聚。女官、女儒、绣帷营也废止。

可见,在军事上、政治上,太平天国的妇女是有相当地位的。这在一定程度上体现了太平天国的纲领和主张。中国自古亦有“四海之内皆兄弟”之说。铜币女书铭文“天下妇女,姊妹一家”,既与太平天国的纲领和主张一致,又有中国传统的基础。民众比较容易接受,有一定的号召力、凝聚力。同时,也体现了女书流行地区结拜姊妹的风俗。

太平天国失败后,藏匿老巢,直至近几十年旧房改建,方得以出土见天,流落朝天宫附近民间收藏之中。

它只有60克,却记载了女书从原来意义上的文化抗争,升华到政治、经济上的平等要求,体现了中国女性高层次的觉醒。作为女性货币,它是中国历史上的第一枚,也是世界历史上的第一枚。而且是最最后一枚,因为时代在进步,男男女女一切已成为过去。

面对这枚女书铜币,我们不禁肃然起敬,为它的精致,更为它的精神。

1864年天京失败期间,转道地,不排除女书铜币收集地朝天宫,因为它是太平天国铸钱机关所在地。朝天宫附近也是当时太平天国“女馆”所在地之一。此币可能在女馆废止,太平天国失败后,藏匿老巢,直至近几十年旧房改建,方得以出土见天,流落朝天宫附近民间收藏之中。

湖南省江永县に伝わる女文字は、女性がつくり、伝えてきたものだが、この文字で伝え合うのは個人的な悲しみや、生きる苦しみや悩み、また、義理の姉妹関係を結ぶときの約束などで、いずれも私的なコミュニケーション手段として用いられてきた。

今回、その女文字が彫り込まれている古銭が見つかったというのは、たいへん大きな意味を持っている。私的な伝達手段の域を越えて、公的な存在で

ある銅貨にその文字を刻んだ例があったということは、女文字の果たす役割の範囲が飛躍的に拡大したということである。以下、この貴重な発見を伝える趙の文章を訳して紹介する。

女書の最も古い資料 一太平天国女書銅貨

趙 麗明

女書は湖南省に流布した農家の女性専用の表音文字で、今や絶滅に瀕している。今までの最も古い史誌の資料は『湖南各県調査筆記』（1931）に記載されたものである。1995年9月18日の『楊子晩報』紙に民間収集家の馮京三氏の『太平天国女書文字錢』という文章が掲載された。この実証は女書が盛んに流布した時期が、清末から民国初年と考えられていたのをさらに百年、すなわち十九世紀初頭に遡らせた。

先日、わたしは南京を訪れ、太平天国女書銅貨所持者である馮京三氏を訪ねた。馮京三氏の説明によれば、この銅貨は彼が1993年に南京朝天宮古物市場の露店で収集したものという。

わたしは女書をすでに十年以上研究しているが、この銅貨を見たとたん、見慣れた字体が目飛び込み、驚きと喜びを禁じえず嘆声をあげた。これは女書だ！本物の女書だ！驚喜したあと、すぐ一連の問題に思い到った。なぜ湖南の深山の女書が千山万水を隔てた遠方の南京の都に出現したのか？なぜふつうの農婦が使った女性文字が国家で定めた文字を使うはずの貨幣上に現れたのか？誰が作ったのか？なぜわざわざこうした女性貨幣が作られたのか？どこで作られたのか？実際に流通して使われたのか？

この貨幣は青銅の彫母錢^{註1}で、直径55ミリで穴はない。正面は楷書の漢字で右から横に読んで「天国」、縦に読んで「聖宝」。その「天」の字の横画は上が長く、「国」の字の中は「或」ではなく「王」になっており、「寶」の字の中は「缶」の代わりに「尔」になっているが、これは太平天国の用字の習慣である。また、太平天国の貨幣の銘文の通例で、「聖宝」は従来の「通宝」

と区別するための称で、いずれも太平天国の貨幣制度の様式と一致する。裏面は上下に隸書体の漢字で「炎壹」の二字が読める。右側は女書文字で「天下婦女」、左側は女書文字で「姉妹一家」となっている。これは女書の典型的な字体で、筆力が熟達し、女書の清秀飄逸な風格を表しており（付図参照）、文字の筆者は女書に精通した人物であるとわかる。文献によれば、「炎壹」とは軍事組織の階級番号である。太平天国は初期には軍の単位で編成されていた。軍帥以上には、監軍・総制・將軍・指揮等の官職があった。その後、組織が絶えず拡大していき、壹・貳・參・肆など数字を用いて区別するようになった。さらに増えると数字の上に五行の炎（火）・水・木・金・土または天・干を加え、それよりも増えると、炎壹正將軍、木正壹甲壹監軍といったように正・副に分けた。「炎壹」は低くても軍以上の階級番号である。その中の「炎」は「爺火華（耶和華）」及び洪秀全の幼名「火秀」の「火」を避けるために「炎」（伙・夥などとも）に代えたものである。

女書と太平天国の発生とはどのような関係にあるか。もともと太平軍はかつて女書流布地域を通過し、当地で軍を二万人に拡大した。粵湘^{註2}の接する江華（今の瑶族自治県）、永明（今の江永）、道州（今の道県）はまさに女書が盛んに行われた中心地帯である。当地には洪秀全の伝説もあり、太平軍の墓葬群もあり、女書の中にも《太平軍が永明に行く》などの作品がある。女書のわかる女性がそのとき太平軍に参加した可能性は確かにある。

太平天国は1853年に天京（今の南京）に建都してのち、「男行女行」という男女の兵営を別々にする分営制度を実行し、各軍に女性軍帥・女性検点・女性指揮・女將軍などを設けた。内務官は天王宮と各王府の中で事務をとり、最高は女性大臣、その他女永承・女宣詔などが宦寺^{註3}の代わりをした。後には、男子の六等世爵と並行する「女爵」も設けた。1855年3月、太平天国は天京で男女の隔離制度を廃止し、夫婦がともに住むことを許した。女営・女

館・綉錦宮も廃止した。

軍事上・政治上、太平天国の女性はある程度の地位を持っていたと見られる。これはある程度太平天国の綱領と主張を体現している。中国は古くから「四海皆兄弟」という説がある。銅貨の女書の銘文の「天下婦女、姉妹一家」は太平天国の綱領・主張と一致し、また中国の伝統的考え方でもあることで、民衆は比較的「姉妹一家」という考え方を受け入れやすく、一定のアピールと集結力がある。「姉妹一家」はまた、女書流布地域の女性たちが義姉妹の契りを結ぶという風習をも体現し、これはまさに女書文化と女書機能の証明でもある。

太平天国は女書とその書き手に政治舞台に登場する機会を与え、女書もまた太平天国に一筆の絢麗な色彩を添えた。さて、この銭は何のために使われたか。実際に使われたのだろうか。

これは1枚の彫母銭であることはすでに収集家や歴史家に認められている。様式は太平天国の貨幣制度に適合し、また独特のもので、まだ第二枚目は発見されておらず、唯一の貨幣の可能性が大きい。その大きさは同時期の清朝の咸豐銅貨五十に相当する。製法は精密で重々しく、表と裏とも二重の輪郭（外枠は広く、内枠は狭い）をもつことは、銅貨には非常にまれである。中心の四角の中の円はうがたず泉譜^{註4}と比べてみると、この貨幣と同期の清の戸部宝泉局で鑄造された彫母銭とよく似ている。正面の楷書の漢字と字体は同期の鎮庫銭とよく似ている。鎮庫銭とは正式に炉を開いて鑄造する前に、記念・進貢・圧勝^{註5}のため、先ず鑄造する特別な大きな銭を指す。

これによって、この女書銅貨は粵湘間の女書に精通した太平軍の「老姉妹」（天京に上つてのち、身分の高い女官となった）が特別に作ったただ一枚の太平天国銅貨の可能性は大きい。この女性たちは相当の権力を握っていたため、天朝の官の名称を用い、国家級の銅貨体制を採用し、国家的レベルの技術と工芸水準を使

用することが出来た。鑄造時期は太平天国が1853年天京に都を建て、1864年天京が陥落するまでの期間のはずである。鑄造地点は女書銅貨収集地の朝天宮であろう。そこは太平天国の鑄錢機関の所在地であったから。朝天宮付近はまた当時太平天国の「女館」の所在地の一つでもある。この貨幣は女館が廃止され、太平天国が失敗したあと、昔の建物にしまわれていたままで、最近旧家屋を建て替えるときに出てきて、朝天宮付近の民間収集家の手に落ちたのであろう。

この貨幣は60グラムしかない軽いものだが、女書がもともとの文化的手段の段階から、政治・経済上の平等を要求する段階に昇華していることを示し、中国女性の目覚めを現している。女性貨幣として、これは中国歴史上最初の一枚で、しかも最後の一枚である。時代が進歩して、男性主宰^{註6}はすべて過去となった。

この一枚の女書銅貨と対面して、我々はその精緻なつくりと、その精神に肅然たる敬意を捧げずにはいられない。

注

1. 彫母錢：母錢とも。実際に流通錢を鑄造するための型のこと。
2. 粵湘：広東省と湖南省
3. 宦寺：宦官のこと
4. 泉譜：古代貨幣の系譜
5. 圧勝：邪氣を押さえ除く
6. 男性主宰：男権主義

この趙の文章を読んで、さらに知りたいことを箇条書きにして、孫が北京に帰った機会に趙に質問をした。以下はその問いと答えである。

Q1 どうして南京の古錢収集家が女書を彫りこんだ古錢を持っていると知りましたか。

A1 人民日報にも書いたように、『楊子晩報』でそれに関する記事を見て知りました。その記事を書いた作者も女書のことをよく知っている人です。

Q2 南京の太平天国の居住地跡から、さらに女書彫りこみの銅銭が出る可能性はないでしょうか。

A2 現在まだそのほかの銅銭は発見されていません。この一枚だけです。これは孤本で、まだ鑄造されていない元本です。

Q3 太平天国の女性軍隊にどのような女性がいたかの記録はないのですか。

A3 太平天国の女性についての記事はたくさんあります。太平天国の史料のなかにあります。たとえば「大脚蛮婆」についてのことなどなど。

Q4 上江墟出身の女性がいた証拠はありませんか。

A4 「道州」というところで軍隊を何万人も増やしました。男か女かは書かれていませんが、おそらくほとんどが「ヤオ族」の女性でしょう。

Q5 太平天国の組織の中で、女性が銅貨を鑄造する権限を持っていたと考えますか。

A5 当時、太平天国の中での女性は地位が高く、官位も高いです。国家級の指導権や財政権をもっていました。将軍が一番低い官位のようにです。女性が銅貨を鑄造する権限を持っていたでしょう。

Q6 太平天国の資料の中に、銅貨以外に女書の書かれた資料がある可能性はありませんか。

A6 ただ待つばかりで、期待しています。

Q7 太平天国の指導者たちが書き残した記録の中に女書に関する記述はありませんか。

A7 たくさんの資料を調べましたが、今はまだ見つかっていません。でも発見する可能性はあると思います。大きな図書館ではほとんど太平天国についての資料があります。女書に関する記述もある可能性が大きいと考えます。

太平天国は19世紀の半ばの史実で、資料も大量に残っているはずである。

女性の軍隊があり、その中に女文字の伝播地域、上江墟の女性がいた可能性は強い（その周辺で軍隊の徴募があり、上江墟の男性が加わったと言う事実が判明している）。その女性の中に、銅貨を作らせることができるほど、高い地位の女性がいたことも間違いない。では、その女性はどうな女性だったのか。どのようにしてこの文字を獲得した女性だったのか。太平天国の軍隊の中でどんな役割を果たしていたのか。この女性についての記録がどこに残っていないか。また、太平天国の人々の中に、漢字とは全く違う美しい文字を見て、何か書き残した人はいなかったか。太平天国の膨大な資料のどこかに、これら、当時、太平天国に集った人々の中の女文字関係者と、その文字について記されたものがあるはずだと思う。

女文字は女性同士の極めて私的な意思伝達手段であるという、従来の規定とは全く違った予想外の役割も果たしていたことが判明した。この新しい展開に、今後の研究・調査の新しい方向と方法論を考える必要に迫られている。

〈追記〉

上記『人民日報』の記事の、太平天国の女書入り銅貨が発見されたことを中国の研究者・大学院生などに話すと、真っ先に、それが本物だとだれが証明するのか、偽造銅貨ではないのか、と疑問が返ってくる。遠藤は、本物だとの前提で大きな発見だと紹介してきたが、真偽を確認することが先ず求められるのかもしれない。またまた大きな難問をつきつけられた思いである。

（えんどう おりえ／ソン キ）